

本願寺「自死問題実態調査」の 分析結果 (4)

教学伝道研究センター
現代宗教課題研究部会

■はじめに

本願寺派の全寺院を対象とした自死問題に関するアンケート調査「自死問題実態調査」について、四回目の分析報告をいたします。

今回は、自死された方の葬儀（以下、「自死者葬儀」と表記）について、次の二点を報告します。第一に、自死者葬儀の経験の有無や回数が、自死に対する意識にどのような影響を与えているのか、第二に、自死者葬儀や年忌法要などにおける僧侶の対応の傾向について報告します。

■自死者葬儀の経験

全アンケート回答数二六九四件のうち、これまでに自死者葬儀を執り行ったことがあるとする回答は、約七六％に相当する二〇五九件でした。

僧籍の取得年数別に分類すると、十年

以下：七四件（約四％）、十一～二十年：二六八件（約一三％）、二十一年以上：一六七二件（約八三％）となります。

当然のことですが、僧籍の取得年数が長くなり、僧侶としての経験が増えるほど、自死者葬儀の経験回数は増えていくことがわかります。

■僧籍の取得年数と

自死者葬儀の経験回数

そこで、僧籍の取得年数と自死者葬儀の経験回数との関係を見ると、図1のような結果になります。僧籍を取得して二十一年以上の僧侶では、実に、約八一％の僧侶が自死者葬儀を経験していることになりました。

また、役職別に自死者葬儀の経験回数を見たのが図2です。それぞれの役職における自死者葬儀を経験した割合を見ると、住職：約八一％、副住職：約七七％、衆徒：約六三％、坊守：約五八％、寺族：約三〇％となっています。

つまり、経験年数の長い僧侶だけでなく、経験年数が六〜二十年の僧侶や、坊^{ぼく}守・衆徒^{しゅと}といった役職にある僧侶であっても、半数を超える方が自死者葬儀を執り行ったことがあると回答しています。

このことは、私たち僧侶が、自死者葬儀を執り行う現実^{じげん}に直面していることを意味しているとともに、自ら命を絶たれた方の多さをあらためて示しています。

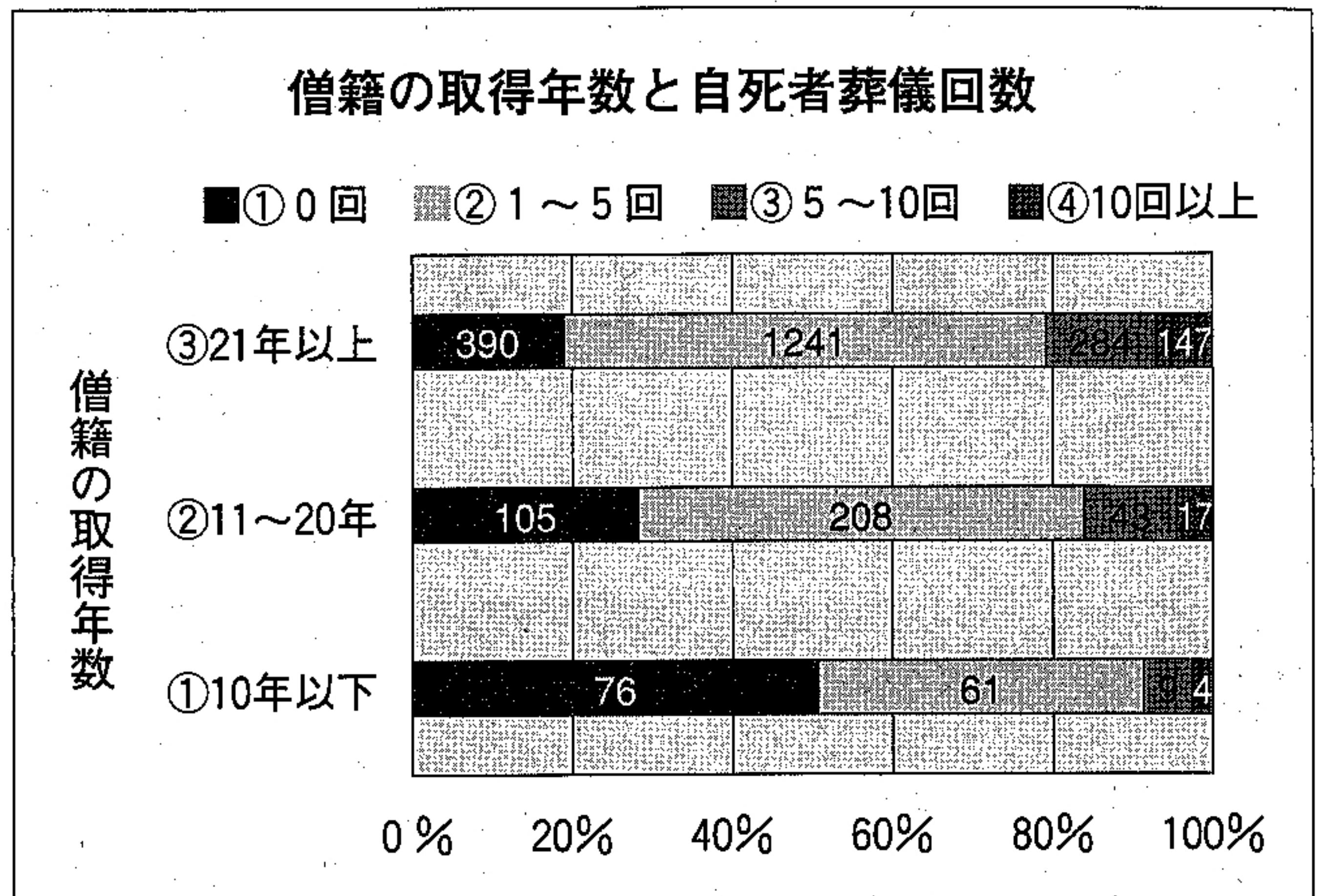
自死遺族の心のケアに関する設問において、自死遺族のケアに関わっていない方にその理由を尋ねました。その中で最も多かった回答が、「該当者と接する機会がなかったから」の六六八件であり、全アンケートの約二五％でした。また、

■ 遺族との接点

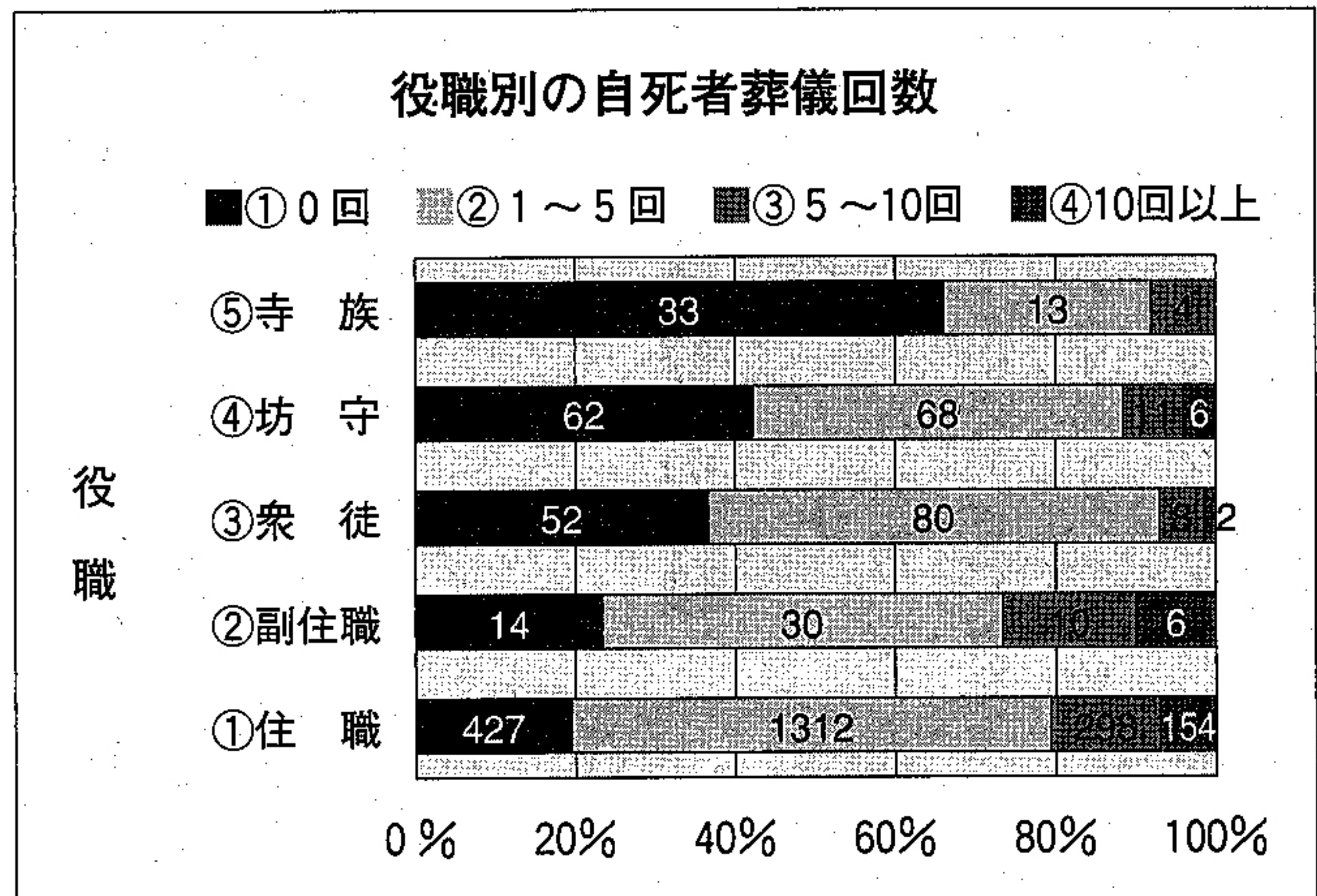
その割合を自死者葬儀の経験回数毎に比較してみると、図3のようになります。^{iv}

ここで注目したいのは、自死者葬儀を十回以上経験している僧侶であっても、二〇％弱の僧侶が「自死遺族と接する機会がなかった」と回答している点です。

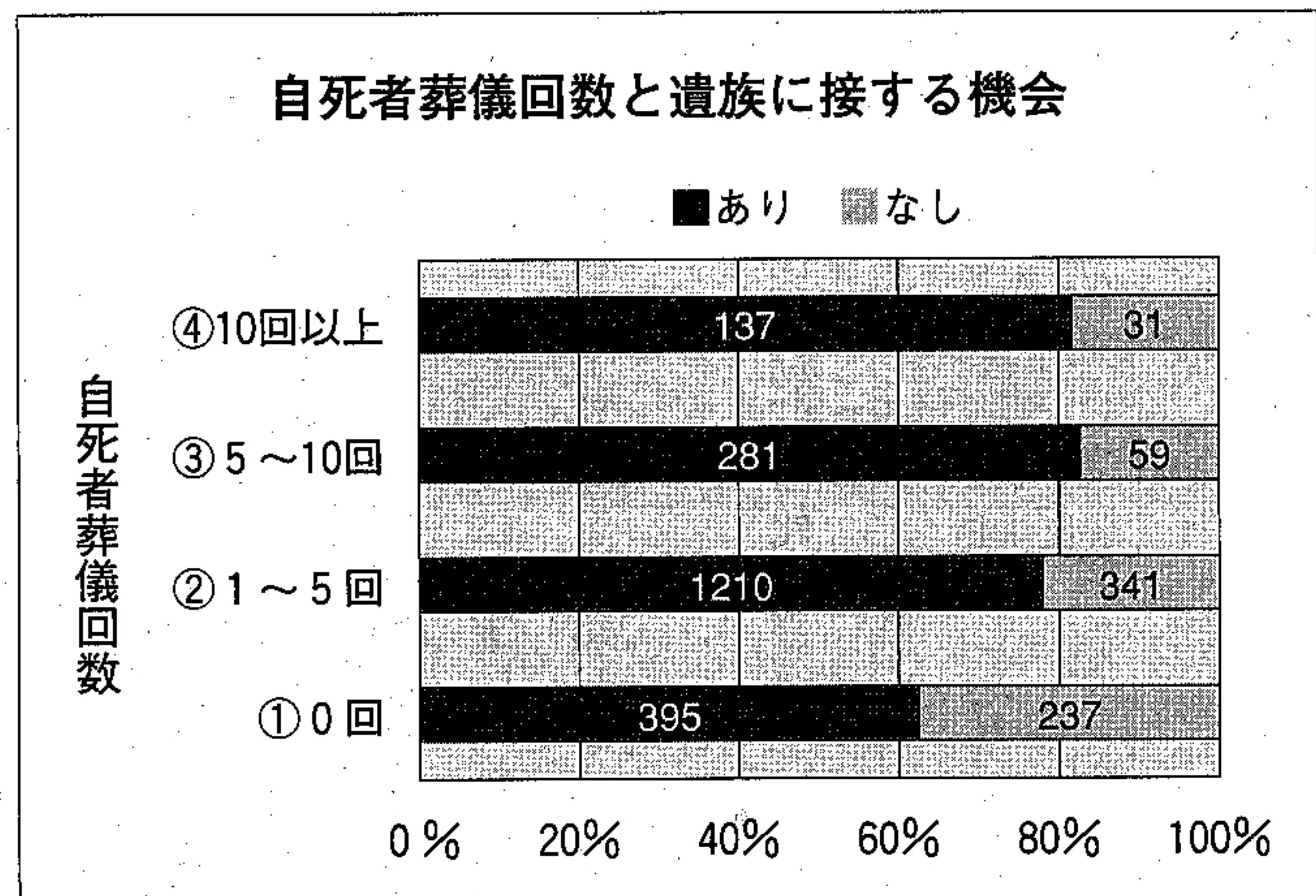
このことは、自死という死が他の死と比べて、より多くの複雑な問題を抱^{かか}えていることを表しています。すなわち、自死



〈図1 僧籍の取得年数と自死者葬儀回数〉



〈図2 役職別の自死者葬儀回数〉



〈図3 自死者葬儀回数と遺族に接する機会〉

者の葬儀においては、葬儀を執り行っているにも拘わらず、遺族と深く関わり得ていないという現状が浮き彫りになっていると言えるでしょう。

■僧侶の担う重要な役割

――葬儀の場面――

葬儀の場合は、自死者の遺族に深く関わりを持つための非常に重要な機会であり、かつ、数少ない機会でもあります。その対応の仕方によっては、遺族が深い悲しみから立ち直る心の作業（悲嘆の仕事／グリーフワーク）を手助け（グリーフケア／グリーフサポート）することになりますし、全く反対に、深く傷付けてしまうことさえあるのです。

その機会に、適切な対応をとれるよう、事前に、きちんと準備しておくことは、非常に大切なことだと思われます。

■僧侶の担う重要な役割

――葬儀以後・法事など――

遺族に対し継続的な援助を行うことは、グリーフケアにおいて大変重要です。しかし、継続的な援助のできる立場にある人は限られています。

その中で、私たち僧侶は、葬儀の後も、中陰法要・百か日法要・年忌法要・月忌法要などにおいて、長期間にわたり継続的な関わりを持つことのできる、非常に特別な立場にあります。

このような立場にある私たち僧侶が、自死に対する正確な理解を持ち、遺族への適切な対応方法を身に付けることができたならば、遺族のグリーフワークにおいて、重要な役割を果たすことができるでしょう。

自死は病死や事故死などに比べ、遺族に対して非常に深刻な影響を及ぼすことが指摘されています。遺族への適切な対応を継続的にすることは、そのまま、遺

された方の連鎖的な自死を防止することにも繋がっている場合もあります。

■自死者葬儀の経験回数と

意識調査との関連

それでは、適切な対応をするために、私たち僧侶はどうすれば良いのでしょうか。

通常、私たちは、経験から多くのことを学びます。同じことは自死の問題にも当てはまるのではないのでしょうか。ここでは、自死者葬儀の経験回数と意識調査を取り上げて、経験を積むことと、自死の実態に対する正確な理解を得ること、との関連について見ていきたいと思います。

意識調査の設問では、

「自殺したい」と口にする人は、本当

は自ら命を絶つことはないと思う。

という自死に対する意見に対して、「思う・やや思う・どちらともいえない・あまり思わない・思わない」の五つから、

回答者の意見に最も近いものを選択していただきました。

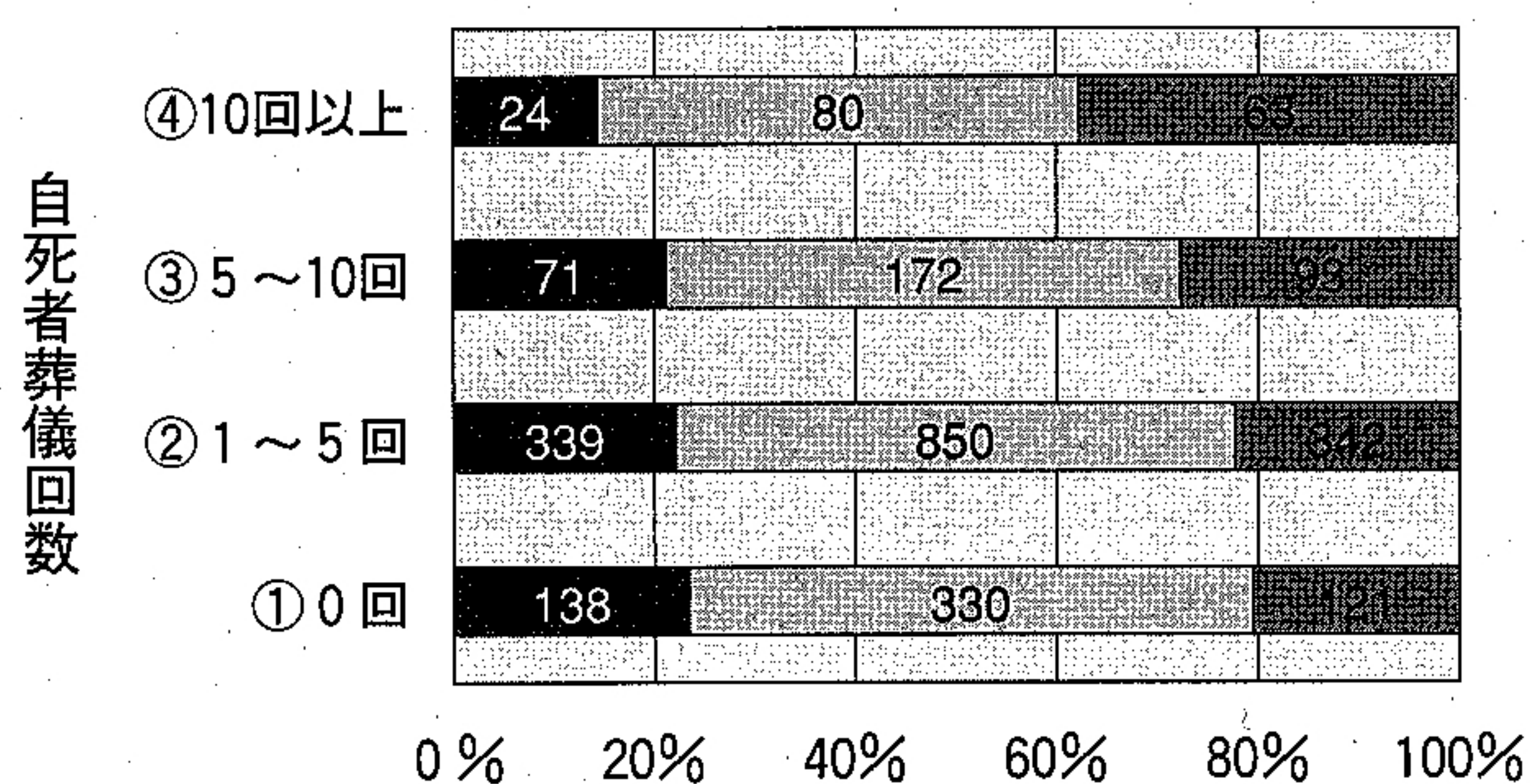
これらの回答を「思う・やや思う」（以下、「思う」と表記）、「どちらともいえない」、「あまり思わない・思わない」（以下、「思わない」と表記）の三グループに分け、自死者葬儀の経験回数間で比較しました（図4参照）。

一般に、自殺したいと口にしても本当はしないと考えられることがあります。しかし、第一回目の報告（『宗報』二〇〇九年六月号）でも触れましたように、「自殺したい」という具体的な言葉を発することは、非常に危険な状態にあるとの指摘が多くの専門家からなされています。臨床経験の豊富な精神科医によれば、自死の兆候の一つとして、「自殺をほめかす」「自殺を口にする」ということが挙げられています。^{vi}

実は、図4を見ると、自死者葬儀の経験回数が多い僧侶ほど、「『自殺したい』と口にする人は、本当は自ら命を絶つことはない」と「③思わない」とする割合

「自殺したい」と口にする人は、本当は自ら命を絶つことはないと思う

■①思う・やや思う ■②どちらともいえない ■③あまり思わない・思わない



〈図4 自死者葬儀回数と意識調査〉

が増えていることがわかります。

このことは、自死者葬儀の経験回数が多い僧侶ほど、自死の実態を正確に把握する割合が増えていることを示しています。

また、その他の意識調査について同様の比較をしてみると、おおよそ、同じ傾向を見ることができました。^{vii}

これらの結果から、自死者葬儀の経験

回数が多い僧侶ほど、自死に対する正確な理解を持っているということが指摘できます。

■経験による意識の変化

しかし、自死者葬儀の経験回数による意識の違いは、それほど大きくないことも明らかになりました。^{viii}

自死者葬儀の経験が、自死に対する正確な知識を得ることに、直結するわけではないことを指摘することができます。

経験と知識とが必ずしも一致しないということは、病死や事故死といった死と比べて、自死という死をとりまく環境が特殊であることを示しています。アンケートの中では、自死遺族ケアについて尋ねた設問に対して、「自死に関する情報を持っていない」「専門的な知識がない」と述べる回答が多くありました。これは、自死がこれまで、社会的に隠蔽（いんぺい）されてきた死であることをよく示しています。

このような状況が、自死への正確な情

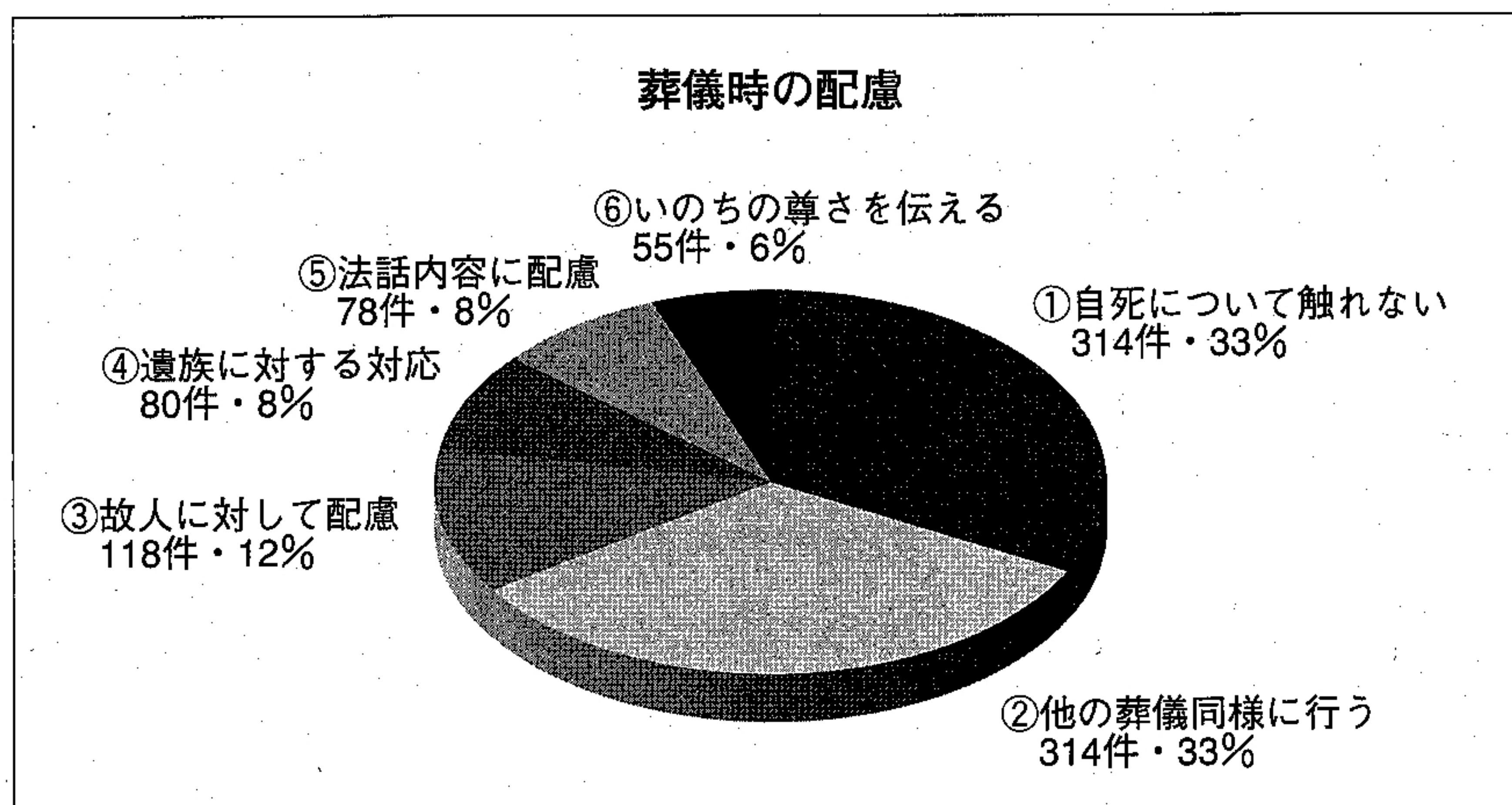
報や、知識を得ることを妨げ、遺族の状況に対する理解の深まりを阻害^{そがい}してしまっていると考えられます。

それでは、自死遺族への適切な関わり方として、どのような点に配慮する必要がありますのでしょうか。実際に私たち僧侶が行っている配慮を通して考えてみたいと思います。

■適切な関わりの重要性

まず、自死者葬儀の際に、現状として、私たち僧侶がどのような配慮をしているのか、自由記述による回答内容を分類すると、

- ①自死について触れない
 - ②他の葬儀同様に行う
 - ③故人に対して配慮する
 - ④遺族に対する対応に配慮する
 - ⑤法話内容に配慮する
 - ⑥いのちの尊さを伝える
- の六つのグループ（図5参照）に分かれました^{ix}。



〈図5 葬儀時の配慮〉

ほとんどの方が遺族の心情に考慮して、さまざまな対応をしている様子が見えがえました。

この中で最も多かった回答グループの一つが「自死について触れない」の約三

三%でした。この回答の背景には、「遺族は、自死で亡くなった事実を公にしたくないはずだ」という、遺族の心情に配慮する考え方がうかがえました。しかし、「自死と知っていないながら、全く触れられないことも苦痛に感じる」という思いも、しばしば自死遺族の方より聞かれる声の一つです。遺族の多様な感情にも留意する必要があります。

また、⑥「いのちの尊さを伝える」ということに対しては、自死した故人は尊いいのちを粗末にしたと責められていると感じてしまいます。自死で親しい人を亡くされた方のストレスは、想像を絶するものです。^{xi} 親しい人を亡くした直後の遺族は、「パニック、否認、ショック、心の空白・麻痺、共感性の症状」にあります。^{xii} このような状態にある方に、故意でないにせよ、責めることになるような言葉かけをしてしまうことは、慎むべきでしょう。アンケート回答の中には、「いのちの尊さを法話したら遺族からひどく怒られた」という回答もありました。

■ 私たち僧侶のできること

グループとして分類されてはいませんが、「とにかく話を聞く」「話を聞くことしかできない」といった回答は六十二件ありました。遺族へのグリーフケアには、なによりもまず、遺族の思いに耳を傾けることが重要であるとの指摘が、多くの専門家からなされています。グリーフケアの現場において、私たち僧侶に求められていることは、気の利いた言葉かけや何か特別で高度な技術ではありません。遺族の思いにただただ寄り添おうとする姿勢からの行動が、遺族のグリーフワークの本当の意味での手助けとなるのです。そうした姿勢から、遺族がなかなか吐き出すことのできない思いに耳を傾け、ただ側にいようと努めることは、非常に大切な行動なのです。

しかしながら、ただただ寄り添うということが、実は、意外に難しいのだということを私たち僧侶は知っておかねばな

りません。この姿勢を身に付けるためには、まず、自死をとりまく環境の特殊性と困難さへの深い理解が大切です。その上で、遺族が置かれている具体的な状況や、そこから生じる感情を想像するための豊かな感性が必要となります。

私たち僧侶は、自死遺族との関わりを避けて通ることはできません。日ごろから自死に対する専門的な知識を得る努力と、遺族の心に寄り添うための感性を鍛える努力を、怠ることなく続けていくたいものです。

(研究員 竹本了悟)

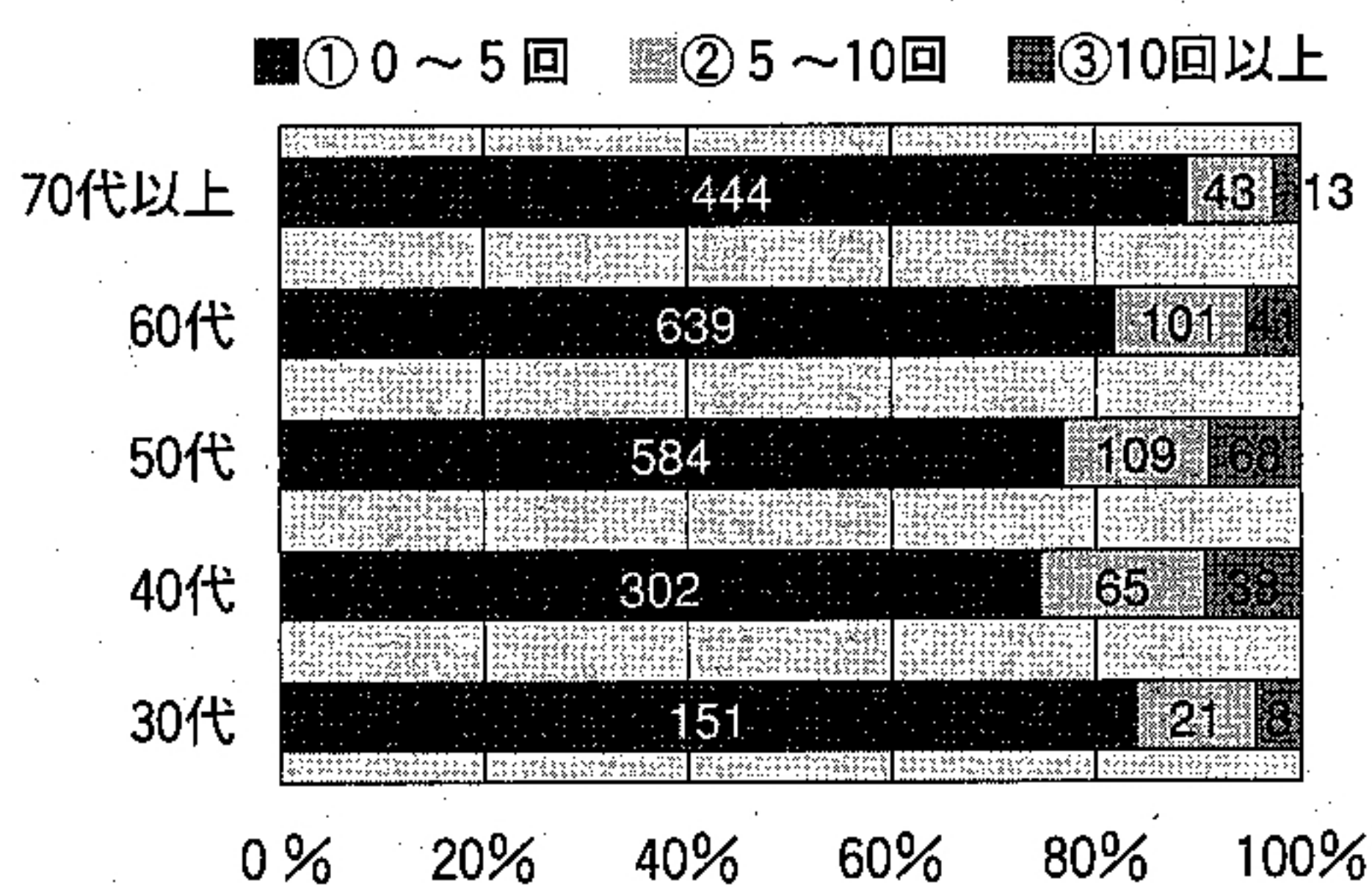
i 本報告では、アンケートの、「これまでに、自死された方の葬儀を執り行ったことがある方は、以下の設問にお答えください。ないという方は、設問Vへお進みください」との設問に対して、回答した方を「自死者の葬儀経験あり」とし、回答していない方を「自死者の葬儀経験なし／0回」として扱

いました。

ii アンケートでは、五年以下と六十年に分けましたが、回答数が少ないため、まとめて十年以下としました。

iii 年代が上がるにしたがって僧侶経験が長くなるとすると、年代が上がるにしたがって、自死者葬儀の経験回数は増えると予想されます。しかしながら、次の図のように、年代によって葬儀経験回数の傾向を見た場合、年代が上がるにしたがって経験回数が減少すると

自死者葬儀の年齢別経験回数



いう結果が出ました。年代と僧侶経験とは必ずしも一致しないということが指摘できます。

iv 「接する機会がなかったから」を選択した回答を「なし」、それ以外を「あり」として図示しました。

v アメリカのデータでは、自死遺児の自殺率は五〜十倍高いといわれています（教学伝道研究センターブックレット『自死、遺された人たち』死別の悲嘆によりそつて、本願寺出版社、二〇〇八、七四頁参照）。

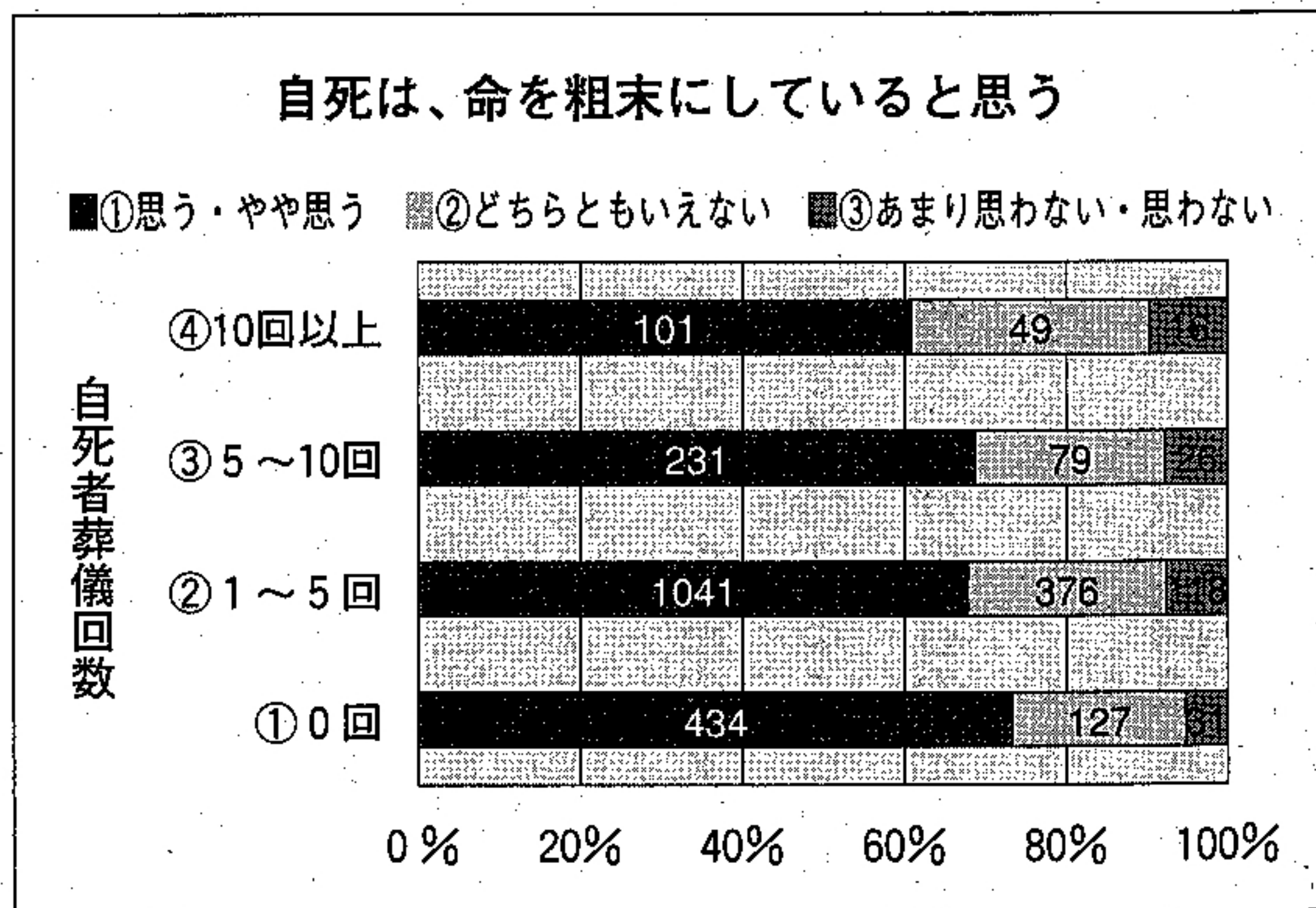
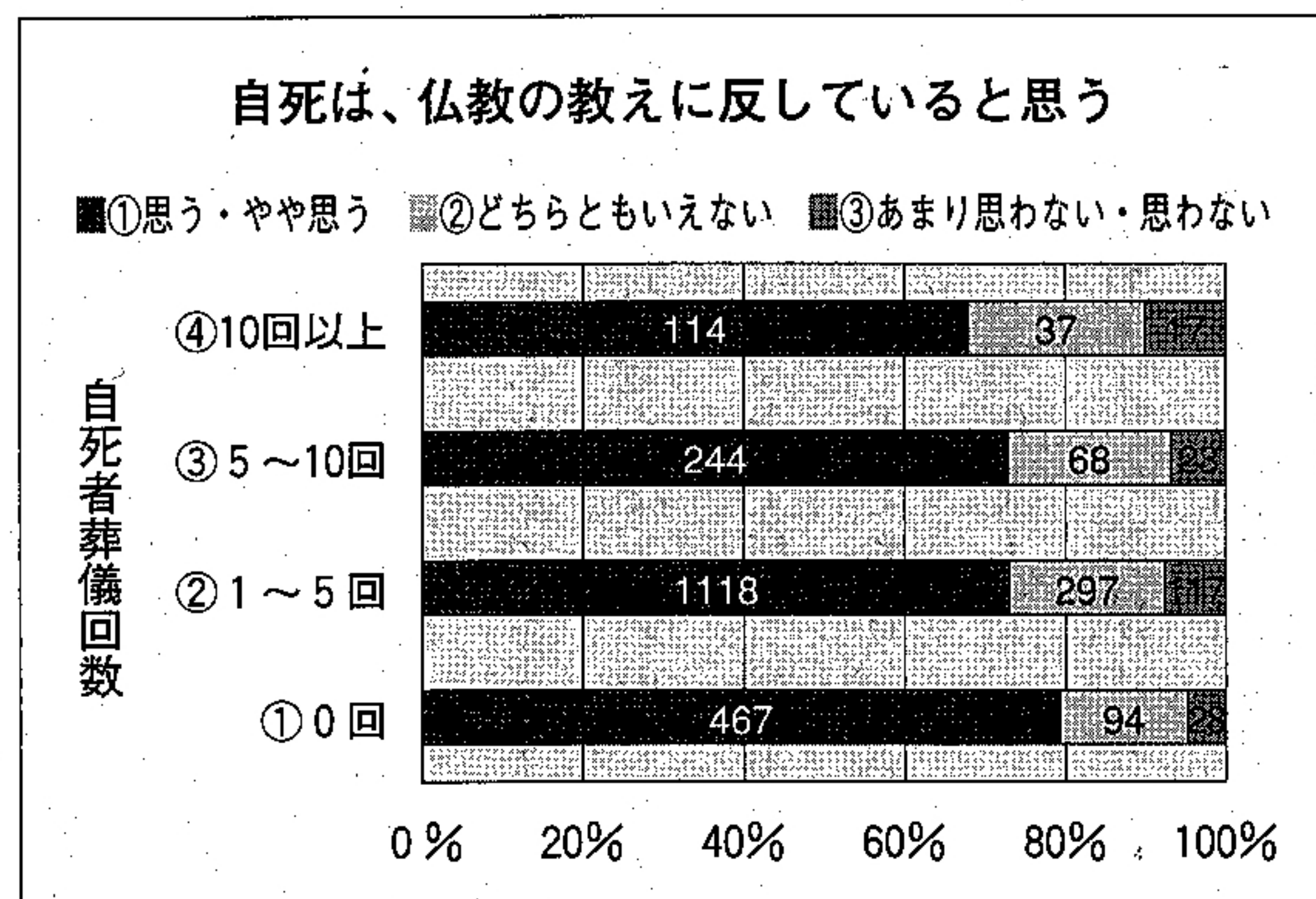
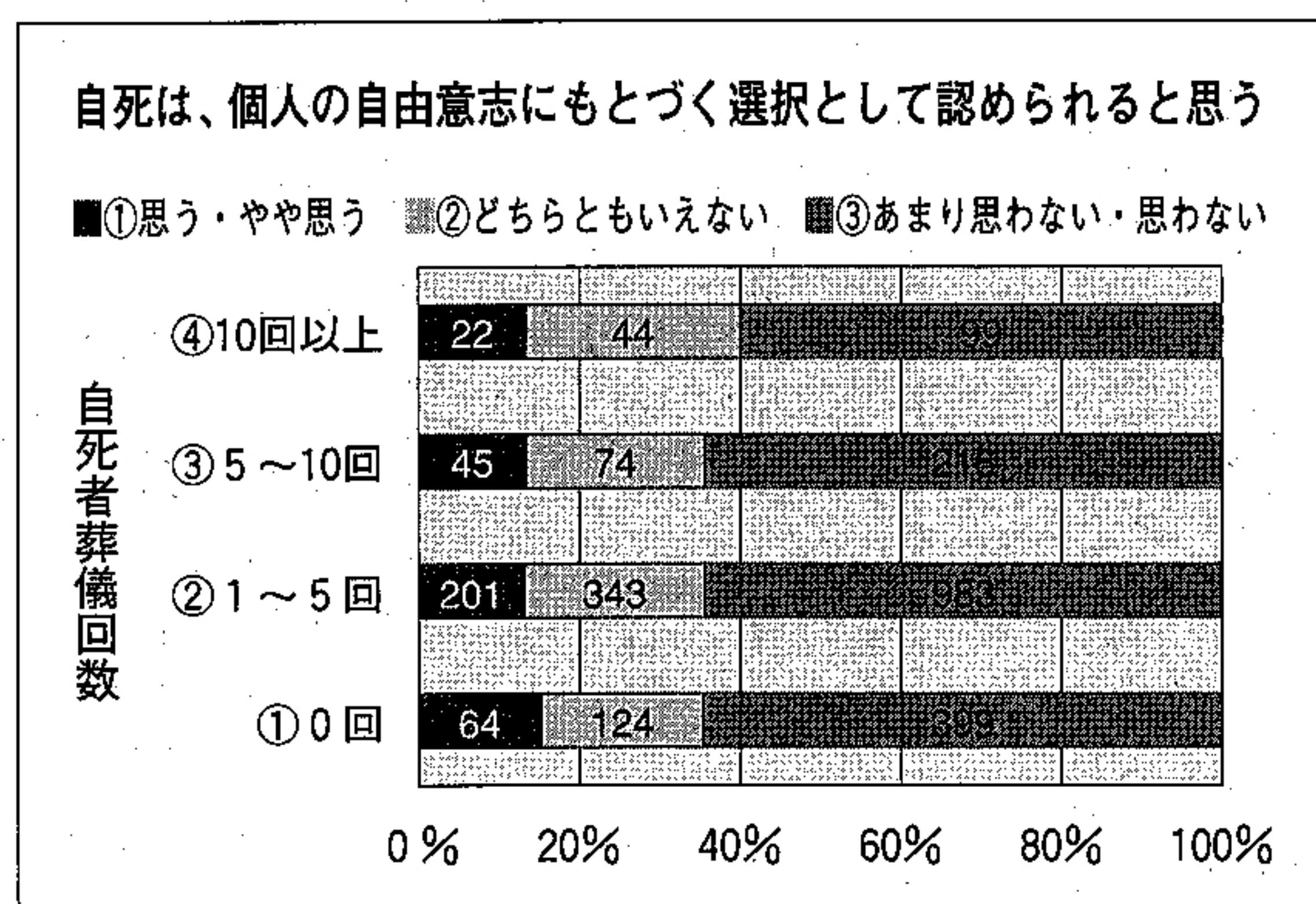
vi 高橋祥友氏『自殺予防』（岩波新書、二〇〇六、一八二頁）には、この点についての指摘が詳しくされています。

vi 高橋祥友氏『自殺予防』（七三頁）には、以下のように指摘されています。これまでに挙げてきたような項目（引用者註：喪失体験、病氣、精神疾患、飲酒量の増加など）を数多く満たす人が「自殺」をほのめかしたり、実際にはつきりと口にした場合は、自殺の危険が非常に高くなっている。

る。「死ぬ、死ぬ」と言う人は本当は死なないと広く信じられているが、これは大きな誤解である。自殺者の大多数は、最期の行動を起こす前に自殺の意図を誰かに打ち明けている。これを的確にとらえられるかどうかが自殺予防の重要な一歩になるのだ。

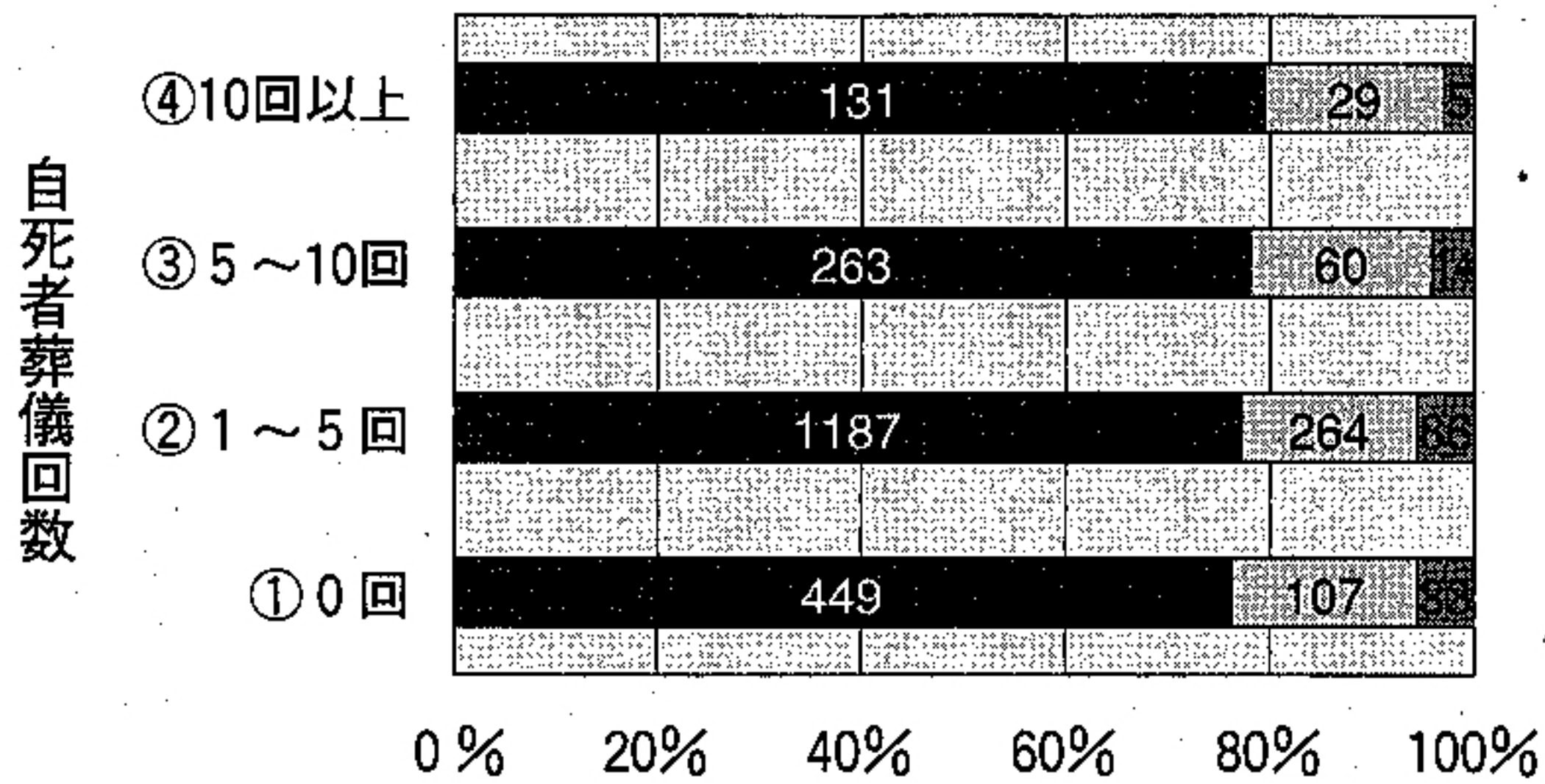
vii

他の意識調査について示します。自死者葬儀の経験回数が増えるにしたがって、自死の実態を正確に認識する。



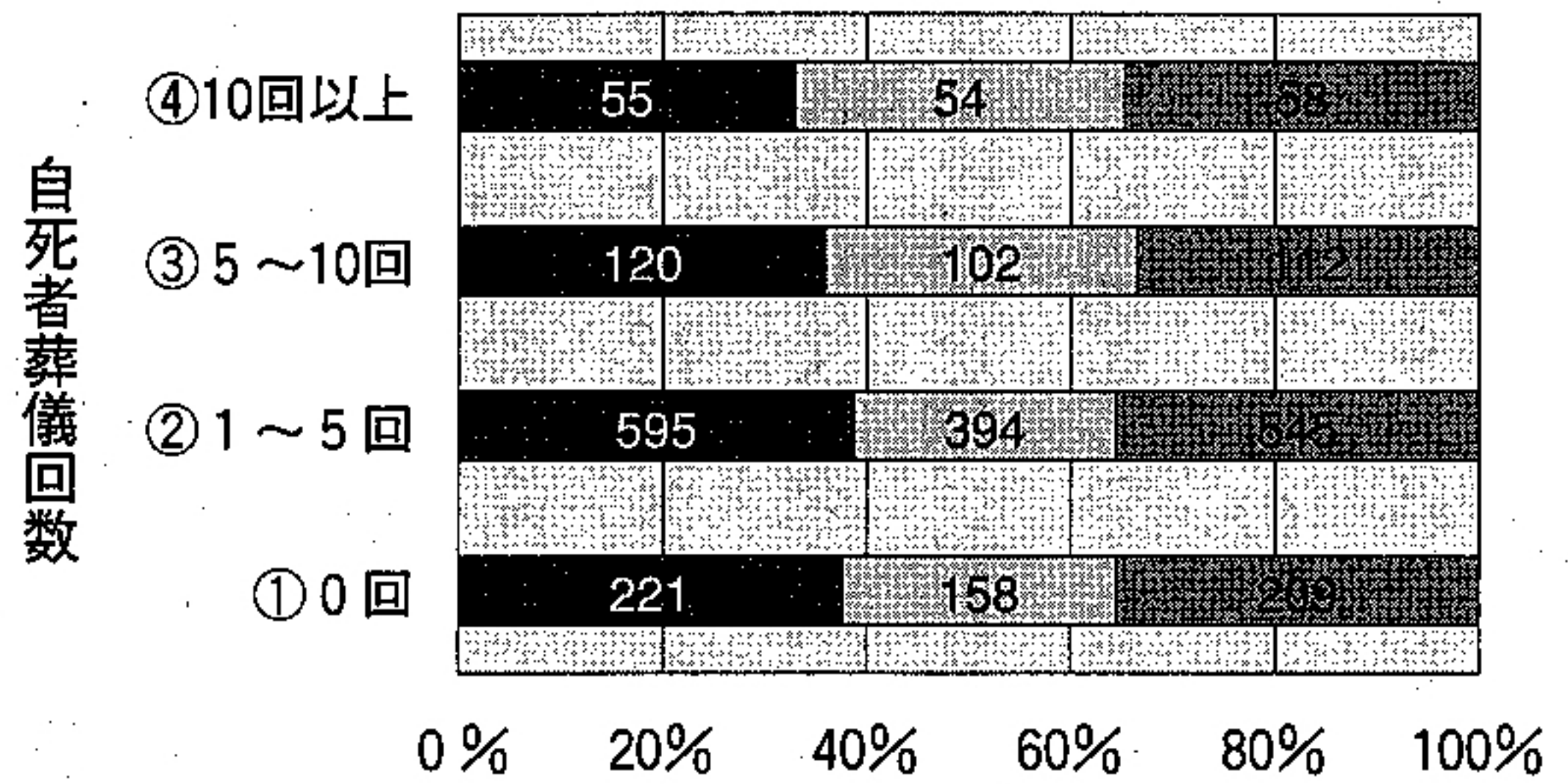
自死は、社会的な要因が強くはたらいっていると思う

■①思う・やや思う ■②どちらともいえない ■③あまり思わない・思わない



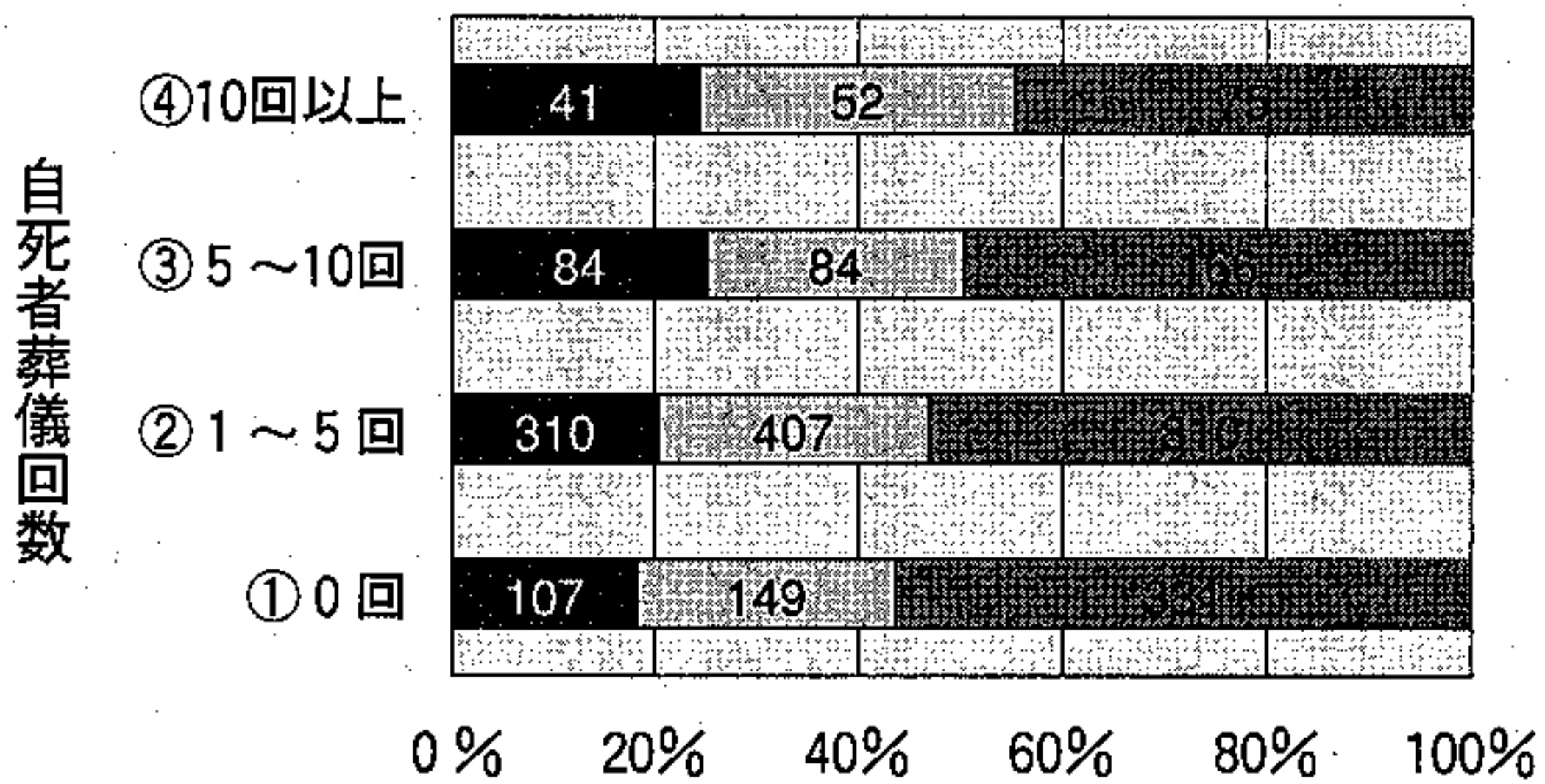
自死は、何の前触れもなく突然起こると思う

■①思う・やや思う ■②どちらともいえない ■③あまり思わない・思わない



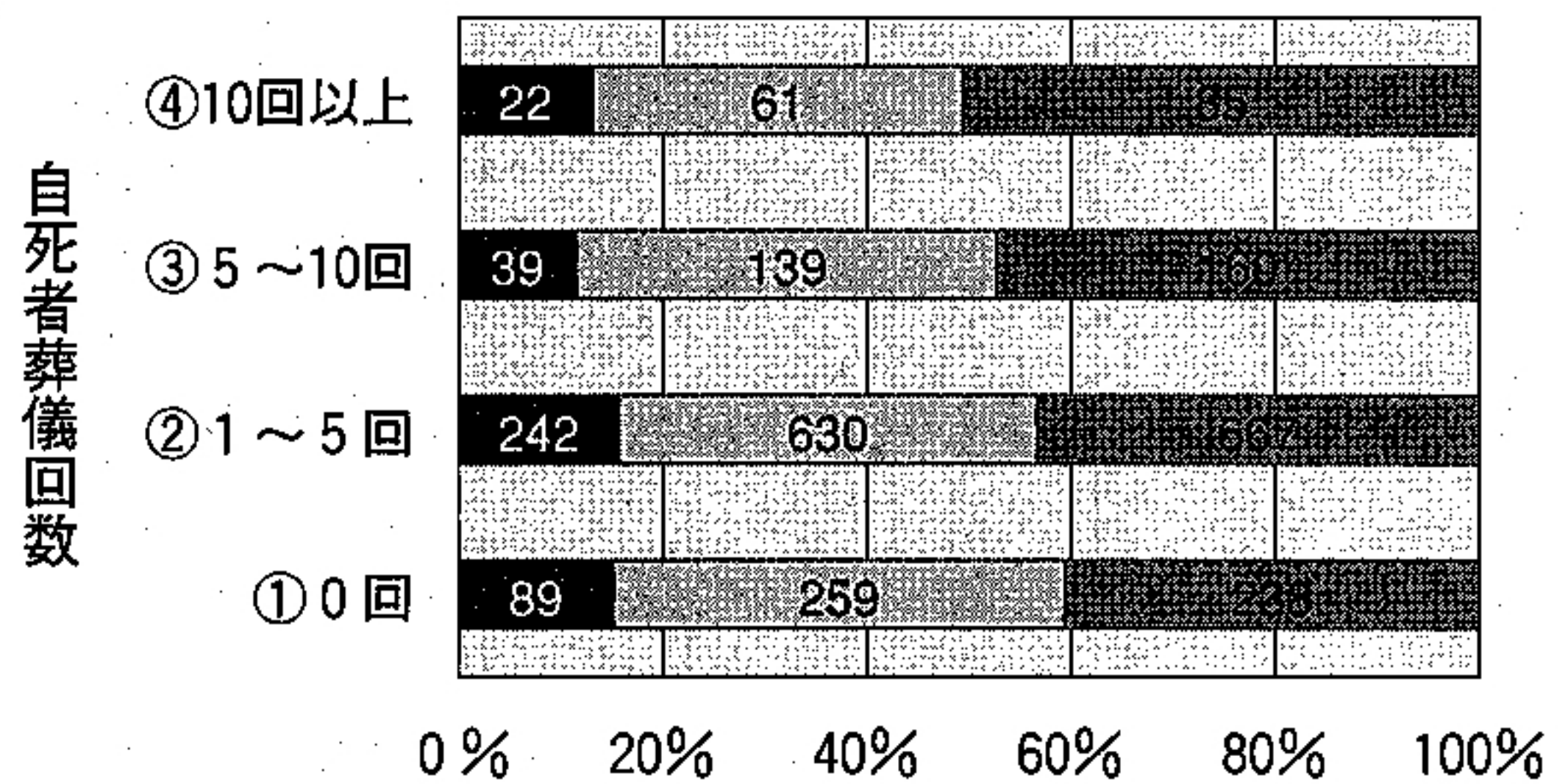
自死は、場合によっては仕方がないことだと思う

■①思う・やや思う ■②どちらともいえない ■③あまり思わない・思わない



自死は、弱い人がするものであると思う

■①思う・やや思う ■②どちらともいえない ■③あまり思わない・思わない



る割合が高まっていることが各図からうかがえますが、「自死は、何の前触れもなく突然起こると思う」の図に顕著なように、その違いは、極めて小さいと指摘することができます。

viii 経験回数が全くないグループと十回以上のグループとでは、最も大きな差でも約一八・一％であり、次に大きな差で約一二・五％でした。

ix 「自死された方の葬儀・年忌法要などの際に、何か特別な内容の法話をされたり、配慮したことなどあれば、具体的にお書きください」という設問について、自由記述による回答をしていただきました。記述式の回答の分析方法につきましては、第三回と同様にテキストマイニングという手法を用いました。この手法は、大量の文章から要約された知識を獲得することを目的としたものであり、分析者の先入観による誤差をなくすることができるという利点があります。この設問に対する回答数は、全アンケートの約四割に相当す

る七九三件でした。

※分析の方法について（『宗報』二〇〇九年八月号掲載の第三回報告より抜粋）

テキストマイニングの「自動分類」という技術を用い、なるべく客観的な分析を行うことを意図しています。

アンケートには、ある程度、答えを予測して作成している面もありますので、分析も主観的になりがちです。この欠点を補い、より客観的な分析を行うことに適しているのがこの技術です。

「自動分類」という手法の概要を述べます。この手法は、アンケートを計算により自動的にグループ分けすることをいいます。計算とは、一件ずつのアンケート同士の距離を測ることを示します。また、ここでの距離は、内容の似ているものは短く、異なるものを長くなるように定めています。計算の結果として、距離が

近いものを同じグループに、遠いものを別のグループに分けていくことになります。

このように計算することによって、より客観的であり、繰り返しても同じ結果が得られる分析ができます。

（早稲田大学理工総研研究員／研究
生雲居玄道）

X 教学伝道研究センターで開催した、「第三回 別離の悲しみを考える会」の講師・鷹見有紀子氏（リメンバー名古屋自死遺族の会代表幹事）から、「苦痛を増したお寺様の言葉」の中の一つとして指摘されています。

xi 前出の会において、鷹見氏より、愛する者を自死で亡くすストレスは、「破壊的レベル——強制収容所暮らしを経験するのにはほぼ匹敵する——に達するとされている」（全米精神医学協会『精神障害の診断例と統計学的に見た発症の原因』より）ことが指摘されました。

xii 詳細は、教学伝道研究センターブックレット『自死、遺された人たちが死別の悲嘆によりそって』六四～六六頁参照。